

# タイにおけるクマートーン信仰について —開運のお守りになった胎児の霊—

野津 幸治

## — 目 次 —

はじめに

1. 「クンチャー、クン・ペーン物語」のなかのクマートーン
2. クマートーンの古式製法
3. クマートーンの新式製法
4. クマートーンの種類・利用目的・祀り方・手放し方
5. クマートーン信仰が普及する過程

おわりに

## はじめに

タイにおける仏教寺院のワットゥモンコン（吉祥物、縁起物、お守り、護符<sup>(1)</sup>などの総称）授与所には、さまざまなお守りや神仏像にまじって男児の像、「クマートーン」（クマーン＝男児、童子：トーン＝金：クマートーン＝金童子、金嬰丸<sup>(2)</sup>）人形が並べられていることがある（写真1）。開運や商売繁盛を願う人びとが購入するという。人形の色、大きさ、格好は一様でないが、日本の招き猫に似て手を上にかざして福や客を招いているようなもの、あるいは福袋を手にしたようなものもある（写真2）。

日本の寺社で授与される縁起物やお守りにもさまざまな種類があり、そのなかには子どもをかたどった人形も含まれる。たとえば、神奈川県横浜市岡村天満宮

---

NOZU, Koji 天理大学国際学部 教授



写真1 ワットゥモンコン授与所に並べられた神仏像（筆者撮影）  
注：クマントーンは中央から左側にかけて並んでいる男児の像



写真2 手招き姿で袋を持つクマントーン（筆者撮影）

の「西瓜天神」、京都市北野東向観音寺の「饅頭喰い人形」などである。寺社からの授与品に限定せず玩具類も含めれば、宮城県仙台市の「赤芥子」、香川県高松市の「ほうこうさん」なども子どもをかたどった人形のお守りである（畑野2013）。

こうした縁起物やお守りのそれぞれには、かならず縁起、由来がある。高松市の「ほうこうさん」の場合は、熱病にかかったお姫様の身代わりとなり、島に流されて亡くなった「おくに」という奉公人を称賛し、人形が作られるようになったことに由来する。その後、子どもが熱病にかかると「ほうこうさん」の人形を抱かせて病気をうつし、人形を海に流して子どもの病気の全快を祈る風習が生まれたという（畑野2013：174）。

一般的に、タイのクマントーンは胎児の霊、またはお守りであるとして、以下のように説明されている。

「母親とともにお腹のなかで死亡した胎児の霊 [phi dek tai phrai]」  
(Uthai 1999：1129)。

「クマントーンは、一般人の理解によれば、一種のお守りである。しかし、実は、『クマントーン』は生まれてこなかった『霊』である。もともとクマントーンの霊は、母親のお腹のなかで死亡した胎児、すなわち『妊婦とともに死亡した [tai thang klom]』胎児の霊であると信じられている。（中略）呪文の知識を持つ人が子どもの霊を連れてきて、子どもとして世話を<sup>(3)</sup>する [養育する]」（Rankhunaniit 2014：91）。

「クマーントーンは、タイ人が昔からよく知っているお守りで、アユッタヤー時代から存在する。多方面の神通力を有し、守護と開運を求めて利用される。相手が自分に惚れてくれるように、相手が自分を好いてくれるように、危険を事前に教えてくれるように、家の留守番をしてくれるように、泥棒を防いでくれるようにさせるのである。霊力についての知識を利用した一種の呪術である」(Thotsaphon 2009:5)。

このように、妊婦とともに死亡した胎児の霊力を利用することによって、守護や開運のご利益を求めて世話、養育しながら所有するお守りがクマーントーンである。では、このクマーントーンにはどのような縁起、由来があり、胎児の霊が開運や商売繁盛を祈願するための人形型のお守りになったのであろうか。そして、タイ人のクマーントーン信仰とはいかなる信仰であると理解すればよいのであろうか。

クマーントーンについての先行研究は非常に少ない。信頼できる文献資料としては、ランクナーニット・カンハロンがチュラーロンコーン大学に提出した博士論文(Rankhunanit 2014)があげられる。ランクナーニットはコミュニケーション論の視点から、タイ社会におけるクマーントーンの神聖性の変容について論じている。とくに重要な役割をはたしてきたマスメディアについて、テレビドラマ・映画とお守りの専門雑誌とでは重視する神聖性が異なることを明らかにした。前者が守護、宗教的世界観の側面を、後者が金運や商売繁盛、経済的利益の側面を重視していて、それぞれクマーントーンの製作者(仏教僧と在家の呪術師)と信奉者が考える神聖性の変容に影響を与えているとした。

また、研究書ではないが、信奉者向けの読み物として、クマーントーンにかんする情報を詳述しているのがトッサポン・チャンパーニットクン(Thotsaphon 2009)である。41カ所あるクマーントーン製作拠点の42人の製作者を紹介している。一般書の常として引用が不明確なことに留意する必要があるものの、巻末に28の協力者・団体の氏名・名称が記載されており、独自に全国の製作拠点、製作者、信奉者、関連団体から情報を収集したことがうかがえる。多数掲載されているクマーントーンの写真はすべて鮮明なカラー写真で、カタログとしての機能も持っている。

以下、本稿では、おもにランクナーニット(Rankhunanit 2014)、トッサポ

ン (Thotsaphon 2009)、およびフィールド調査<sup>(4)</sup>によって得られた資料に依拠しながらクマントーンの製法、種類、利用目的、祀り方、手放し方を紹介する。また、お守りとして普及するようになった過程について検証し、クマントーン信仰の概要と特徴を明らかにしていきたい。さらに、今後クマントーン信仰をめぐって検討されるべき課題について若干の考察を加えたい。

## 1. 「クンチャー、クン・ペーン物語」のなかのクマントーン

タイでは一般に「クマントーンがアユッタヤー時代から存在した」という言説が流布している。その根拠となっているのが「クンチャー、クン・ペーン物語」のなかのクマントーンである。「クンチャー、クン・ペーン物語」は、アユッタヤー時代、1491～1529年ごろのラーマーティポディー2世の時代当時の事実に基づいて記述されたと考えられている物語である。バンコク王朝のラーマ2世（在位1809-1824）が宮廷に詩人たちを集めて各章を割り当てて、セーパー形式（ふしをつけて語る形式の詞）に書かせた。作者はラーマ2世をはじめ、王子（後のラーマ3世）、スントンプー、クルー・チェーンといった一流詩人からなる。物語は美男で武芸呪術に長じたクン・ペーンと禿げ頭ではあるが金満家のクンチャーが妖艶なワントーンを取ったり取られたりしながら展開する（富田1981：256-257, 1987：302）。

この「クンチャー、クン・ペーン物語」の第16章が「ブアクリーの子、金嬰丸（クマントーン）の誕生」である（富田1981：146-148）。この章のなかで、クン・ペーンがクマントーンを製作する状況を描写している場面の抄訳はつぎのとおりである。

「クン・ペーンは夕食をとらず、全家眠之呪を唱えて、ブアクリーを先に眠らせておき、ローソク、線香、花など金嬰丸を作る儀式に必要な品々を取り揃え、頭陀袋に入れると短刀を握ってブアクリーの寝所へ行った。（中略）『やい、自分の亭主を殺そうとした不義者め、約束通りおれの息子はもらって行くぜ』と言いきま短刀をぶすり、腹を剖いてみれば、予想は変わらず男の子、やれ嬉しやと胎児を取り出すと布に包み、家を出て南寺の本堂に走った。早速3本のローソクに火を点じ、線香と花を供え、諸種の手続きを完了する

と、神仙に祈り、一心不乱に経と呪を唱えていると、胎児は人語を解し、神通力を有する小柄で無色透明な幽霊の金嬰丸と化した。夜はほのぼのと明けそめていた」（富田1981：147-148）。

クン・ペーンは妻のブアクリーが父親（ムーン・ハーン）と共謀して自分を毒殺しようとしたことに腹を立て、妻を生かしておけぬと決心した。妻のお腹を切り開いて取り出した胎児を仏教寺院の布薩堂（本堂）に運び出し、自分が有する呪文の力でクマーントーンを作った。つまり、殺生という悪業をはたらいたあと、仏教で浄域とされる場所で一種の聖化儀礼をおこなった結果、胎児が神通力を有する幽霊に変化したのである。その後、クン・ペーンはクマーントーンの神通力をつぎのようなことに利用する。

「折しも点々と滴る血の跡を追って、ムーン・ハーンの一隊が殺到し、寺の本堂を包囲したが、クン・ペーンは金嬰丸の肩に乗って小さな穴から外へくぐり出た」（富田1981：148）。

「思わずかつとなって、天雷<sup>(6)</sup>を振り上げたが、金嬰丸が耳もとで、『お父さん、殺生はやめておきましょう』とささやいたので」（富田1981：149）。

「クン・ペーン父子は金嬰丸の肩に乗って城内に入り」（富田1981：166）。

「するとクン・ペーンは、王を捕らえてアユッタヤーへ連れては行くが、命乞いをしてやると約束したのち、金嬰丸に王の言動を監視するように命じて」（富田1981：166）。

以上のように「クンチャーン、クン・ペーン物語」において、クマーントーンはみずからの意志ではなく、父親によって作られ、父親のために働かされる幽霊であった。まだ現在のような開運、商売繁盛などのご利益を得るためのお守りとして扱われてはいなかった。また、成仏できないことを理由に出没し、怨念から人びとを恐怖におとしいれる妖怪、怪異というよりは、むしろ敵を攻撃するための道具、武器、戦闘要員として使役されたと言える。こうした霊的存在を使役する様相は、日本における陰陽師の使役する鬼神、すなわち式神を想起させる。クン・ペーンは、陰陽師が死霊をあやつったように、クマーントーンを「霊の下僕」として使役したととらえられよう。

しかし、この「クンチャーン、クン・ペーン物語」のクマーントーンについての記述だけをもって、アユッタヤー時代におけるクマーントーン存在事実を断

言することは早計である。タイ文学研究の成果が示す事実なのかもしれないが、管見のかぎりクン・ペーン以外にクマントーンを作った事例があるという情報、資料がまだ確認できていないからである。ここで言えることは、タイの人びとの間ではアユッタヤー時代にクマントーンが存在したと信じられているということである。

## 2. クマントーンの古式製法

ランクナーニット (Rankhunaniit 2014: 92) によれば、古いサムット・コーイ (コーイの樹皮で製した紙で作ったタイ手冊本) のなかに、クマントーンがアユッタヤー時代から存在していたことを示す記述があるという。残念ながらその出典が明示されていないため内容を確認できないが、そこに記載された製法を古式製法として紹介しておきたい。以下の記述は、トッサポン (Thotsaphon 2009: 9-11) とランクナーニット (Rankhunaniit 2014: 93-94) に依拠している。

古式製法は2つの段階に分けられる。すなわち、死体の入手からへその緒 (臍帯<sup>(6)</sup>) の切断までと、寺院での儀式 (死体を火であぶり乾かし、漆を塗って金箔を貼る) である。まず第1段階で死体を入手しなければならないが、土曜日または火曜日<sup>(7)</sup>に母親のお腹のなかで死んだ胎児を用いることが求められる。また、クマントーンを必要とする人は、夜間にひとりで死体の入手に出かけてゆき、儀式をおこなわなければならない。儀式では、呪文を吹きかけた霊験あらたかな短刀で母親のお腹を切開して胎児を取り出す。その間、呪文を唱えていなければならない。そして、子どもの死体に対して、つぎのように話しかける。

「息子よ。父さんはお前が大好きだ。私はお前を子どもにしたい。私と一緒に  
一緒に行こうよ。私はお前を幸せに育ててあげる。お前は喜んで私と一緒に  
行くのだ。息子よ」 (Rankhunaniit 2014: 93)。

その呼びかけに対する返答は、父親となる本人が自分で言うことになる。子どもの死体を立たせた状態にして、「喜んで子どもになります」 (Rankhunaniit 2014: 93) と本当に生きているかのごとくしゃべる所作をするのである。そしてへその緒を切り、死体入手場所での儀式を終える。

つぎの第2段階は寺院での儀式に移る。寺院では、布薩堂、仏殿、または結界

内で、夜が明ける前に子どもの死体を火であぶって完全に乾かす必要がある。場所を寺院に移し、以下に述べるようなさまざまな資材で式場を整えるのは、母親の霊が儀式を邪魔しにやってきて、子どもを奪い去ることを防ぐためである。儀式で使う道具は、1. 式場の天井に取り付ける白い布、2. 四方に柱として立てるためのラックの木、3. 式場の周囲を7周させるための聖糸、4. 天井に取り付けるためのモンクットプラプッタチャオ護符、5. 八方に取り付けるためのトリーニシンハー護符（裏面はイティピソー護符）である。

儀式で使う道具の準備が整うと、チャイヤプルックの木<sup>(9)</sup>を用いて三脚を作る。子どもの死体を置くための台は、マリットの木<sup>(10)</sup>、カンクラオの木<sup>(11)</sup>、カンパイの莖<sup>(12)</sup>を用いて作る。そして聖糸で周りを囲み、モンクットプラプッタチャオ護符を天井に取り付け、裏面にイティピソー護符が描かれたトリーニシンハー護符を八方に取り付ける。そうして火をともし、あぶり始めるのであるが、死体をこがしてはならない。火であぶっている間は、ずっとつぎのような呪文を唱えていなければならない。

「クマーントーンは大いなる神通力を持つ。どこにでも行ける。どこの家にも入って行ける。人の心の中にも入って行ける。三宝の功德の威力で行ける。三宝の威力、神々の神通力により、大いなる神通力を持つクマーントーンとなりたまえ」（Rankhunani 2014 : 94）。

完全に死体が乾ききったところで火を消し、また別の呪文を唱える。それから死体全体に漆を塗って金箔を貼る。そして最後に招請の文句を述べる。

「クマーントーンよ。今、お前はクマーントーンになった。私とここで暮らさない。私はお前を幸せに育ててあげよう。おもちゃもある。食べるものもある。お菓子もある。ひもじい思いはさせない。本当に安らかに休める寝床もある。私がお前に何か助けを求めたら、私のために助けておくれ」（Rankhunani 2014 : 94）。

これで儀式は終わりである。「クンチャー・クン・ペーン物語」の訳（富田1981）は抄訳で、全訳ではない。したがって、安易な比較は避けなければならない。ただ、はっきりしていることは、古式製法をクン・ペーンによる製法と比べると、死体の入手からへその緒の切断までの段階と寺院での儀式の段階の2段階に分けられる点、呪文を唱えてクマーントーンを作る点においてはおおむね合致

している。

クン・ペーンは自分の子どもを使ってクマートーンを作ったのであるが、あまり現実的ではない。実態としては、どこかで妊婦が亡くなったという情報を得るところから始めなければならないはずである。特定の妊婦の胎児にターゲットを絞ってクマートーンを確実に作るためには、土曜日に殺人するという手段しかない。しかし、通常の共同体のあり方を考えると、これもまたあまり現実的とは思えない。アユッタヤー時代は、現代に比べ安産が相当少なかったであろうこと、そして呪術が日常生活のなかで必要だったことが推測されるにしても、古式製法によるクマートーンの製作が頻繁におこなわれたということは、なかなか想像しにくいことである。

### 3. クマートーンの新式製法

現代社会において、古式製法のように胎児からクマートーンを作ることは、倫理的にも法的にも許されない。それで新式製法は古式製法と大きく異なった様相を呈している。今日お守りとして製作されているクマートーンは、男児像の人形を作り、霊を招き、人形に宿らせることでできあがる。しかし、その詳細はかなりバラエティに富んでいる。

人形製作のためのおもな材料は、金属、象牙に彫刻を施したお守り、石膏、レジジン樹脂、7カ所の墓地の土、船着き場の土、八重咲きラックの木またはマヨム(13)の木、布薩堂の周囲にある結界に付着した苔、土曜日に死亡し火曜日に火葬した人の遺灰である。(14)これらの材料を単独、または混合させて男児像の人形を成形し、その人形に招いた霊を宿らせる。多くの場合、呪文の知識を有する有名な仏教僧、もしくは在家の呪術師が呪文を吹きかけた人形を購入することになるが、呪術師から得た呪文を自分で吹きかける方法もある。人形には心と五元素（五行説の木・火・土・金・水）を吹きかけ、子どもの霊として誕生させる。また、師匠の霊に供物をささげて儀式をおこない、子どもの霊を求めていることや師匠たちの智慧と仁徳を分けてほしいと奏上することで、霊を人形に宿らせる方法もある（Rankhunani 2014：94-95）。

男児像の人形は、基本的には頭頂にまげを結び、布の端を巻いて前から股間を

通し、腰の後ろに挟み込むチョークラベーンをはき、上着を着用せず、肩から斜めに鎖の装飾を身につけた姿をしている。しかし、すべて同じ特徴で統一されているわけではない。まげを結っていないもの、チョークラベーンをはいていないもの、鎖の装飾を身につけていないものもある。大きさも統一されていない。首からぶらさげられる小型のものもあれば、据え置き型のものもある。据え置き型も大小さまざまで、携帯可能な小型のものから祭壇に安置したままにしておくような大型のものも作られる。古式製法では金箔を貼って金色のクマントーンが作られたが、現在の新式製法で作られたクマントーン人形の色は、金色に統一されているわけではない。金色が中心ではあるが、肌色、茶色、黒色もある。現状では金色であることがクマントーンと呼ぶための必要条件ではない。

人形のとる姿勢や格好も統一されていない。基本的には座像がもっとも多いように見受けられるが、立像もある。右手を上にかざして手招きしているもの、両手を上にかざして手招きしているもの、袋を持っているもの、へその緒を吸う<sup>(15)</sup>ものもある。このような多様性は、製法上の都合と製作の意図が多様であることに起因するのであろう。しかし、それだけではなく、信奉者のニーズが多様であることも関連していると考えられる。設置場所や購入目的によって求めるものが異なるのであれば、選択肢の多い方が信奉者には好都合である。

ランクナーニット (Rankhunaniit 2014: 95-97) は、新式製法の例を3つ示している。<sup>(16)</sup>ひとつ目は、7カ所の墓地の土とプラーイクマーン粉末を混ぜて作る製法である。プラーイクマーン粉末は、子どもの遺骨を叩き潰し、イッティチェー粉末とパタマン粉末を混ぜ合わせた粉末である。イッティチェー粉末は、呪文を掌に書いて顔をパタパタとはたいて惚れ薬を作るための粉末である。パタマン粉末は、呪文を唱えて作られた霊験あらたかな粉末、すなわちディンソーポーン (アルミナを多量に含んだ白い粘土) 白墨を用いて石板に文字を書きつけ、パタマン経を唱えながら文字を書いたり消したりすることから得られたディンソーポーン白墨の粉末のことである。この製法によるクマントーンは、霊験あらたかで、強い神通力を有しているが、功罪あわせもっている。なぜなら、招かれる霊が墓地にいた求生の霊 (死後もさまよっている霊) だからである。それで悪事もおこなうクマントーンになってしまう。このクマントーンに宿る霊は成長することができる。

2つ目は、土または木材で作られ、ヤーナテープ（神）を招く製法である。ヤーナテープは高尚な神であるとされる。この製法によるクマントーンは、プラクルアン（小仏像型のお守り）と一緒に呪文を吹きかける聖化儀礼を経て作られる。また、このクマントーンは善良である。なぜなら、招かれるヤーナテープは、天上界で瞑想し、智慧能力を得て、徳を積んでいるからである。したがって、この製法によるクマントーンを入手した信奉者にも仏法の実践が求められる。信奉者が戒律を守らない場合、ご利益が得られない。このクマントーンは、信奉者の年齢とともに成長するのではない。クマントーン自身および信奉者の智慧能力と仁徳に応じて成長する。

3つ目は、結実前に枯死した木（八重咲きラックの木とマヨムの木）で作る製法である。結実前に枯死した木には神が宿っていて、もとより靈驗あらたかである。木の入手後、製作者は霊が誕生するまで呪文を唱える。これは「霊を蘇えらせる儀式」と呼ばれる。誕生した霊は成長せず、子どものままである。人に危害を加えるような強い力を持っていないとされる。また、よく世話をしなければ、衰弱し、消滅する。逆によく世話をしてもらえれば、神通力を持ち、信奉者に幸運と成功をもたらす。

トッサボン（Thotsaphon 2009 : 44）に掲載されている写真のキャプションからすると、製作年が特定できる新式製法によるもっとも古いクマントーンは、1942年にナコーンパトム県サムガーム寺のテー師によって製作されたものである。また、同書はサムットソクラーム県スアンルアン寺に安置され、ピーチュック・クマーンと呼ばれている木彫りのクマントーンが、約200年前、寺院設立のころのクマントーンである可能性を示唆している。ただ、それは現在同寺でクマントーンを製作している僧マイ師が夜半に瞑想していたとき、眼前に現れたピーチュック・クマーンが語ったこととして紹介されているだけである（Thotsaphon 2009 : 111）。したがって、古式製法から人形に霊を宿らせる新式製法への変化が、いつ、どこで起こり、新式製法が誰によって始められたのか、正確には不明であると言えない。

#### 4. クマントーンの種類・利用目的・祀り方・手放し方

ランクナーニットによれば、クマントーンは目的別に大きく2種類に分けられる (Rankhunani 2014 : 97-98)。1種類目は、「殺し屋クマントーン (クマントーン・ペッチャカートまたはクマントーン・ペット)」と呼ばれる。他者に危害を加えるのに使用するために作られ、残虐性を持っている。無残な死に方をした死者の霊を招きよせ、人形に宿らせる。その神通力は、敵に正気を失わせる、敵に追いつく、敵を即刻殺してしまう、などである。殺し屋クマントーンは一部の黒魔術愛好家にだけ信奉されているもので、一般のタイ人の利用はあまりないとされる。

2種類目は、「開運 (チョークラップ) ・慈愛大愛好 (メーター・マハーニヨム) のクマントーン」と呼ばれる。運気を上げること、さまざまな形態で手助けをしてもらうことを目的に製作される。慈愛 (メーター)<sup>(17)</sup> は、ほかの人から慈愛の心で接してもらえることであり、大愛好 (マハーニヨム) は、相手に好ましい人物であると思ってもらえることを意味する。また、親が子どもに名前を付けるように、クマントーンにはそれぞれ縁起のよい名前が付けられる。たとえば、クマントーン・ウドムスック (富福)、クマントーン・ウドムラップ (富運)、クマントーン・ナムチョーク (導運) などがある。現在流通しているもののほとんどがこの種のクマントーンである。

この「開運・慈愛大愛好のクマントーン」のおもな利用目的は、泥棒や災難を防ぐために家の留守番をさせること、世話をする人のさまざまな活動・仕事を援助させること、遠方の出来事や入手しにくい情報を調べさせること、ささやき声で情報を伝達させること、夢で今の運勢を教えさせること、危険を回避して安全でいられるように守護させること、ほかの人に慈愛の心で接してもらえるようにさせること、ほかの人に好ましい人物であると思ってもらえるようにさせることである (Rankhunani 2014 : 105)。

さて、信奉者は、製作者からクマントーンを受け取ると、まずクマントーンと一緒に暮らすよう招請しなければならない。つぎに、クマントーンに対し、適切な居所を与える必要がある。その際、家のなかに専用の神棚を設置し、ほかの神仏像などと共用の棚に置かないことが肝要である。信奉者のなかには、専用

の家、寝具、おもちゃを与える人もいる。クマーントーンには、食べ物、飲み物（とくに赤いジュース）、お菓子を欠かさずに供えなければならない（写真3）。また、頻繁にクマーントーンに話しかけることも重要である。その際、実の子や孫に対してするのと同様、美しい言葉遣いをすることが求められる。クマーントーンとかわした約束はかならず守らなければならない。クマーントーンにお願いをし、結願した場合にも、お菓子とおもちゃを買い与えることを忘れてはならない（Ran-kh unanit 2014：105）。



写真3 供えられたジュースとお菓子（筆者撮影）

トッサボン（Thotsaphon 2009：22）によれば、クマーントーンを手放す方法もある。たとえば、繋がっていた気持ちが切れた、恐怖心が生まれた、あるいはクマーントーン入手後に子や孫が不幸になったときには、クマーントーンを手放し、その霊をつぎの新しい界へと向かわせる。まず、クマーントーンに対し、「息子、クマーントーンよ。運命のときが来た。息子よ、新しく生まれ変わってほしい。今より高尚な界で生まれてほしい。もうこの界に留まるな。愛するがゆえに息子に告げるのだ」と語りかける。つぎにクマーントーンを地中に埋め、香しい花をふりかける。そうして「これは亡くなったお前の存在要素だ。すぐにくずれて土になる。父さんと母さんは、お前がよりよい界に生まれるために土をかけるのだ。しかし、まずお前に五戒を授けよう。1. 不殺生、2. 不偷盗、3. 不邪淫、4. 不妄語、5. 不飲酒。お前には父さんと母さんから五戒を授かってほしい。父さんと母さんは徳を積み、追善供養をする」と告げる。その翌日、托鉢の僧に食べ物を献じ、布施をおこない、クマーントーンのために追善供養をする。そうするとクマーントーンの霊はこの界から抜け出し、もう一段上の土地神として生まれることができるとされる。また、さらに徳積みを続けると、樹木に宿る神として生まれることができるとも言われている。

## 5. クマントーン信仰が普及する過程

1942年、ナコーンパトム県サムガーム寺のテー師が新式製法でクマントーンを製作したことはすでに述べた。テー師は伯父のデー師をはじめ複数の師からさまざまな呪文の知識を学んだとされるが、実は同県ターコン寺のチェム師からクマントーン製作の知識を学んだと言われている (Rankhunani 2014 : 99)。



したがってチェム師が製作した「へその緒を吸うクマントーン」(写真4)の方が、より古いものであると考えられる。しかし、チェム師のクマントーンは製作年が不明である。また、チェム師も頭陀行に出て、多くの師からさまざまな種類の呪文の知識を学んだとされるが、クマントーン製作の知識を誰から学んだのかよくわかっていない<sup>(18)</sup>。

写真4 ターコン寺境内に掲示されている「へその緒を吸うクマーン」の写真 (筆者撮影)

1942年 (第1期) 以降、テー師は、1954年 (第2期)、1957年 (第3期) にクマントーンを製作している (Thotsaphon 2009 : 44-64)。そして、テー師の跡を継いでサムガーム寺の住職に就任したのがイエーム師である。イエーム師は、テー師から呪文の知識すべてを受け継いだとされる。またクマントーン製作の方法も受け継いだ。イエーム師が製作した最初のワットゥモンコンは、1973年のメダル型お守りである。その後クマントーンの製作をおこない、「チョー」という名が付けられているが、製作年は不明である。おそらく1973年から1982年の間に製作されたと推定できる。なぜなら、トッサポンが製作年を明示しているものでもっとも古いものは、1982年のクマントーンだからである。その後、イエーム師は1992年にも新しいクマントーンを製作している (Thotsaphon 2009 : 65-73)。

さて、この時期、クマントーンは、あまり人びとの間で注目されなかったようである。当時は、ほかの一般的な小仏像型のお守りなどと同様、寄進をした人に僧から配布される「授与品」でしかなかったのであろう。お守りは不思議なご

利益があることが知られたのち、人気上昇とともに価値とニーズが高まって、請求しなくてもいただける受動的な「授与品」から、売り場で買い求める能動的な「商品」へと変化してゆくからである。

そうしたなか事件が起きる。1994年、ハーン・ラックサーチット氏、当時よく知られた名前では「沙弥のエー」が、サラブリー県ノンラカム寺の火葬台の床下において、本当の子どもの死体からクマントーンを作るという、古式製法の手順でクマントーンに呪文を吹きかける儀式をおこなったのである。ハーンは逮捕され、1年の禁固刑に処された。彼は呪文を吹きかけるところ、子どもの死体を焼くところをビデオテープに記録していた。それがマスメディアによって広められ、大きなニュースとなった (Rankhunani 2014 : 106)。

その後、2002年3月、タニット・チットヌクーン監督ファイブスターズ・プロダクション制作による映画「クン・ペーン」が映画館で封切られた。それは「クンチャー、クン・ペーン物語」を題材にしていた。その映画では、古式製法の手順でクマントーンを製作する映像が提示された。すなわち、母親のお腹のなかの胎児を取り出して火であぶり、クマントーンを作る呪文を唱え、敵を攻撃する武器として利用したのである。ただし、古式製法第2段階の火であぶり乾かし、呪文を吹きかける場所が寺院ではなく、洞窟に設定されていた点が原作と異なっていた。これは黒魔術的な儀式を仏教寺院でおこなうことをためらうような考え方が、以前よりは現代タイ社会に浸透してきたことを反映しているのではないかと考えられる。映画の内容は、呪術に頼っても家族の幸せは得られず、知性や理性をもって問題解決を図ることの大切さを伝えようとしたものであった (Rankhunani 2014 : 189-203)。

翌2003年、新聞「コムチャットルック」2月18日号に記事が掲載された。「子どもの死体発見、非合法妊娠中絶クリニックで、買い占められお守りを製作。ホルマリン注射をうち、電子レンジで乾燥させていた。価格は1万バーツからで、海外での販売価格は10万バーツ (2017年1月6日現在で約31万7,000円) の単位に跳ね上がっていた。購入には事前予約が必要で、おもな市場はシンガポール、マレーシア、香港」 (Rankhunani 2014 : 18) というものであった。この事件は、この時期、タイで製作された古式製法のクマントーンが霊験あらたかであるとして、アジア各国の中国系の人たちから注目されていたことを示している。

そして、2009年7月7日、チャンネル3のテレビ番組「ティーシップ」で、元歌手「ジャックとチン (Jack&Jill)<sup>(19)</sup>」ことチャカパン・カーンソムポップ氏とチャカパン・カーンソムポップ氏へのインタビューが放送された。2人は兄弟で、人気歌手から企業家に転身し、大成功をおさめたのであるが、その成功の一部が、クマントーン信仰のおかげであると話した。運気が上がり、ビジネスで成功したと信じており、1,000体以上のクマントーンを所有していると述べている。彼らにご利益をもたらしたのが、サームガーム寺のテー師とイエーム師のクマントーンであることも明かされた (Rankhunani 2014 : 107-108)。

結果的にこのテレビ番組が、その後のクマントーンの流行に火をつけたと言われている。それまで「目立っていなかった」(Rankhunani 2014 : 109) のは、もともとは「クンチャー、クン・ペーン物語」のクン・ペーンのように、母親とともに死んだ胎児の霊の神通力を呪文の知識を有する人が利用するものであるとの認識が定着していたからであろう。それが、寺院で容易に入手でき、呪文の知識がなくても所有できる開運のお守りの一種であるとの認識が一気に広まったのである。それにあわせてクマントーンを製作する寺院や在家呪術師の拠点も増加した (Rankhunani 2014 : 18-19)。

実際、トッサポン (Thotsaphon 2009) の著作をはじめ、タイ全国の有名僧たちのクマントーンを集めて掲載した書籍、有名無名を問わずさまざまな分野の人が経験したクマントーンの奇跡的神通力についてのインタビュー記事が増加したとされる。また、この流行は、クマントーンにかんするウェブサイトやブログの登場をもたらした。さらに、クマントーンを購入するためにタイへやってくるマレーシア、シンガポール、台湾といった国や地域の人びとが増加した。そして、クマントーンについての書籍が、これら外国の中国系信奉者の求めに応じて中国語へと翻訳されたのである (Rankhunani 2014 : 108-109)。

筆者が訪問したナコンパトム県パイローム寺でも、広々とした境内のあちこちに中国語で書かれた案内表示板が掲示されていた。また、ターコン寺の「サーラー・マハーヤン (大護符堂)」の天井と壁には多数の巨大な護符の図が描かれていたが、それぞれに寄進をした外国の中国系信奉者の氏名や家族の名前が英語で記されていた (写真5)。いずれも外国の中国系の人びとから相当信仰を集めていることが実感できる光景であった。

また、2012年（9月～10月）と2013年（9月～11月）、チョンラムピー・プロダクションのテレビドラマ「シックスセンス：スーラック・サンパット・ファチャイ（Sixth Sense：心で感じる愛を伝える）」シーズン1と2がチャンネル3で放送された。どんなに科学技術が発展しても、

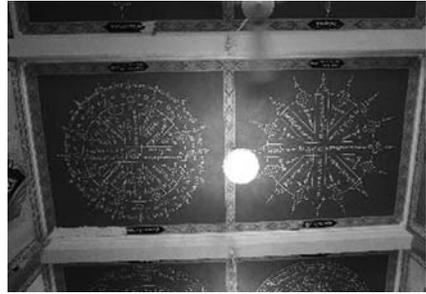


写真5 天井に描かれた護符の図（筆者撮影）  
注：右が「八方プラ・イティピソー護符」。寄進した外国人の氏名も記されている。

人生の問題解決には呪術やお守りへの信仰がタイ人には欠かせないことをテーマにしている。主人公は、靈感の強い5人の女性社員である。従来、小仏像型のお守りを首からぶらさげる、あるいは蒐集マニアは男性にほぼ限られるというイメージがあった。それが、クマーントーンは男女の別なく、また呪文の知識を有していなくても、誰でも世話をしながら所有できるお守りとして普及したことを示している。従来のクマーントーンの利用目的である守護、注意喚起、情報伝達、財産保護以外に、女性と男性の間の「愛の仲介者」としての役割が新たに付加された。このドラマのクマーントーンは、「クマーリートーン」である。すなわち、男児（クマーン）ではなく女兒（クマーリー）で、「クマーリカー」と名付けられた人形の役を、7～9歳位の女兒が演じている。また、主人公の5人の女性のうち、1人は恋人がアメリカ人という設定で、クマーリカーに別途「Golden Baby」という名前を付けて呼んでいる。これは、現在クマーントーンがタイだけではなく、ほかの国や地域の人びとからも注目されていることを象徴している（Rankhunait 2014：229-240）。

さらに、2013年11月、パークプーム・ウォンチンダー監督、エンジェルアンドベア・プロダクション制作「ピー・カオ・ピー・オーク（霊が入り、霊が出る）」という映画が上映された。この映画の時代設定も現代である。クマーントーンの所有者は女子大生であり、現代の若者の間にもクマーントーンが受け入れられていることを示している。人形は石膏に着色した立像である。頭髮は左右に分かれた弁髪で、左手には金色の袋、右手には銀色の袋を持っている。小型の携帯可能なお守りであり、所有者の話し相手でもある。また、上述のテレビドラマ「シックスセンス」と同様、愛を伝える媒体としての役割もある。所有者は自分に好意

を寄せる男性にクマントーンを「あげる」。一方、もらった男性は「君のところに（クマントーンを）連れて会いに行く」と約束する（Rankhunani 2014：204-218）。

以上のことから、タイにおいてクマントーン信仰が普及する過程はつぎのようにまとめられる。遅くとも第二次世界大戦のころから2009年まで、クマントーンは、限られた一部の寺院で寄進をした人に配布される「授与品」にすぎなかったと思われる。むしろ同種のお守りを求めていた海外の中国系の人びとから関心を持たれてきた。それが2009年のテレビ番組において、有名人がクマントーンのご利益を得て事業で成功をおさめた話が明らかになり、タイ全国にサムゲーム寺のテー師とイエーム師の製作したクマントーンが知れ渡った。胎児の霊というイメージの強かったクマントーンが、開運、商売繁盛のお守りとして広く認知されたのである。クマントーンを求める人が増えるにしたがって、受動的「授与品」から能動的「商品」となったクマントーンを製作する寺院、僧、さらには在家の呪術師がつぎつぎに現れた。また、書籍、雑誌だけでなく、インターネットをとおして情報が海外にも広まった結果、マレーシアやシンガポールなどから買いにくる人がますます増加した。さらに、テレビドラマと映画をとおして、タイ人の間でもクマントーンについての認知度が上昇したと考えられる。<sup>(20)</sup>

## おわりに

現在知られている最古のクマントーンは、アユッタヤー時代と推定されているクン・ペーンのクマントーンである。それ以前のクマントーンが確認できない以上、結局のところ、このクン・ペーンのクマントーンがタイにおけるクマントーン信仰の縁起であるとみなされよう。しかし、霊的下僕からお守りとなった今では、呪力によって不特定の胎児の霊から作られた人形の霊力への信仰である。したがって、信奉者にとっては、誰が霊験あらたかなクマントーンを作ったのかという情報が重要である。「ほうこうさん」の「おくに」の話のような縁起、由来よりも、「チャックとチン」が語ったようなご利益体験談から得られる情報が信仰の基盤になっている。

さて、本稿の冒頭でも述べたように、タイには多種多様なお守り、護符などが

あり、ワットゥモンコンと総称している。クマーントーンは、ほかのワットゥモンコンと何が同じで何が異なるのであろうか。クマーントーンがワットゥモンコン市場で流通している小仏像型のお守りなどと同じお守りとして扱われるのは、呪文を吹きかけることで靈験あらたかなもの、神聖なものになる、いわゆる聖化儀礼を経ているという製作上の共通点があるからであろう。こうしたお守りは「クルアン・ブルックセーク（呪文を吹きかけるもの）」というカテゴリーでくられる。しかし、クマーントーンは、食べ物、飲み物、おもちゃを単にお供えし、祈願をするためにあるということではなく、自分の子どもとして「世話をする」あるいは「養育する」必要がある点が、ほかのお守りや護符とは異なっている。このような世話をしたい、養育したいという心理的欲求を背景にした流行は、2015年から2016年初めごろにかけて流行したルークテープ信仰<sup>(21)</sup>にもあてはまる。

そこで必要となるのが、タイの人びとの流行に強く影響している現代社会の変化との関係についての検討である。とくに少子化の進行が、「本当の子育て」の代替行為としてのクマーントーンやルークテープの「養育」の流行とリンクしているということも考えられるのではなかろうか。また、同様の子育ての代替行為となりうるペットの飼育では得られないような開運、商売繁盛のご利益が期待できるということになれば、クマーントーンを入手するための寄進への意欲も増加するであろう。しかもペットは老化し、やがて死に至るが、人形であるクマーントーンは、長期間、子どものままでいてくれる。

一部の人気のある寺院の僧が作製したクマーントーンは高値で売買されているという<sup>(22)</sup>。それは少しでも靈験あらたかなものを手に入れ、運氣を上げたいということだけが目的の行為ではない。高価な物を手に入れたい、もしくは投機の対象にしたい、ビジネスにつなげたいと考えての行為でもある。すなわち、宗教的側面より経済的側面を重視した行為であり、そこには有名な小仏像型のお守りやメダル型のお守りの流行、たとえばチャトゥカームラーマテープの流行<sup>(23)</sup>のときと同様の心理が働いていると考えてよいのかもしれない。

一方、寺院と僧の側からすれば、クマーントーンの授与には寺院の建築・修理費の資金調達、いわゆる勧進の目的がある。サムットソクラーム県スアンルアン寺では布薩堂、庫裏、鐘楼、火葬場など境内施設の整備費約1億バーツ（2017年1月6日現在で約3億1,700万円）を勧進で賄った（Thotsaphon 2009：111-113）。

ナコーンパトム県カンペンセーン寺では2005年、2006年にクマントーンを作ったが、それも布薩堂建立資金を集めるためであった。その目的が達成された2007年にはクマントーンを作らなかったという<sup>(24)</sup>。結局、寺院側は勧進に使えるお守りを作って授与するのである。使えるお守りとは、ご利益の信頼性が広く認知され、信奉者側の需要が高まったお守りである。このようなメカニズムの問題については、より多角的な視点で検討を進める必要がある。

ところでクマントーンと類似したお守りに「ラック・ヨム」と「ルーククローク」がある。ラック・ヨムは立ち枯れしたラックの木とマヨムの木から作るお守りである。木の枝を一對の子どもの形に彫る。檀香油を入れた瓶に浸しておき、呪文を吹きかけ、霊を宿らせる。人に好かれるためや開運のために利用する。一方、ルーククロークは母胎内で死亡した胎児、または早産のために死亡した子どもの死体から作るお守りである。五体満足ではあるが非常に小さい子どもに金箔を貼り、脚付き盆にのせ、祭壇に安置しておく。するとルーククロークの霊が両親を危険から守り、幸運をもたらすと信じられている。生きている子どもを世話するのと同様にルーククロークにも食べ物とおもちゃを与える。ルーククロークの場合は、母胎内で死亡した犬や猫の死体からでも作ることができる (Rom 2011 : 162-163)。ラック・ヨムとルーククロークは、製法もご利益もクマントーンとよく似ている。クマントーン信仰とあわせて考えると、タイ人が胎児・子どもの死体に対して何か特別な神秘的力や神聖さを感じているということも考えられる。

最後にタイ以外にもクマントーン信仰と同類の信仰が存在する点を指摘しておきたい。陳令嫻 (2006:23) によれば、台湾には「嬰霊」と「小鬼」信仰がある。嬰霊は中絶で死ぬ、生まれてすぐ死ぬ、流産で死ぬ、生まれる前にすでに母親のお腹で死んでいる子どもの霊魂のことである。親に幸運をもたらす子もいれば、たたりをする子もいる。一方、小鬼は夭逝した子どもの霊魂で、小鬼を養うことで自分の願いを叶えることができるとされる。これを「養小鬼」といい、金銭、名声、愛情がもらえるとされている。台湾の人を含むタイ国外の中国系の人びとが、タイで作られたクマントーンを好んで購入していることとの関連も検討すべき課題である。

## 謝辞

本研究はJSPS科研費JP15H05192の助成を受けたものです。資料収集に際し、四国学院大学関泰子教授と長崎県立大学ピヤ・ボンサピタックサンティ准教授からご協力、ご助言をいただきました。また胎児と胎児付属物の関係については天理大学安井眞奈美教授にご教示いただきました。記して感謝の意を表します。

## 注

- (1) 本稿ではタイ語のクルアンラーンまたはクルアンラーン・コーンクランを「お守り」、ヤンを「護符」と訳す。
- (2) クマートーンのトーンを省略して「クマーン」と呼ぶこともある。人形（トゥッカター）なので「トゥッカートーン」と呼ぶこともある。金嬰丸は富田（1981）が考案した訳語。
- (3) タイ語はリアンである。クリティニー（2016）は「世話」、富田（1981）は「飼育」の訳語をあてている。本稿では「世話」と「養育」を併用する。
- (4) フィールド調査は2016年8月26日から8月29日にかけて実施した。
- (5) 天雷は刀の名前。
- (6) タイ語のロックには、胎盤、後産、胞衣（えな）の意味がある（富田 1987：1474）。しかし、トッサポン（Thotsaphon 2009）に「クマートーン・ドゥート・ロック」と称される人形の写真が数体掲載されており、いずれも明らかにへその緒を吸っている。胎児と胎児付属物の関係を示す子宮の断面図を専門書（松本清一編1999『系統看護学講座 専門24母性看護学2』医学書院17頁）で確認し、本稿ではロックを「へその緒（臍帯）」と訳した。
- (7) タイでは、土曜日と火曜日は「強硬な」曜日であるとみなされている。
- (8) ラックは、ガガイモ科カロトロピス属。英名crown flower。「ラックラー」（一重咲き）と「ラックソーン」（八重咲き）の2品種ある。
- (9) チャイヤブルックは、マメ科ナンバンサイカチ属。英名 golden shower。
- (10) マリットは、カキノキ科カキノキ属ケガキ。英名butter fruit。
- (11) カンクラオは、リンドウ科（旧マチン科）ファグラエア属テンブス。
- (12) カンパイは、マメ科アフゲキア属アフゲキア・セリケア。蔓性常緑低木。
- (13) 墓地の土とは、寺院の火葬台の下の土と遺骨の灰を混ぜ合わせたものである。船着き場の土とは、夫が死んだ寡婦の家の船着き場の土のことである。どこの墓地、どこの船着場でもよ

- い（2016年8月29日、カンペンセーン寺の僧タンクアイ師への聞き取り）。「7カ所」の7という数字については、チュラーロンコーン大学社会研究所モンタカーン・チムマーミー研究員によれば、日曜日から始まる曜日の7番目の土曜日を意味し、注(7)で述べたように強硬なことを示すという説があるとのことであった（2016年11月12日、長崎県立大学における科研研究会での聞き取り）。
- (14) マヨムは、コミカンソウ科（旧トウダイグサ科）。英名star gooseberry。
- (15) ナコーンパトム県ターコン寺の僧ニコム師によれば、へその緒を吸う格好は、富を吸いあげ、金持ちになれることを表している（2016年8月29日の聞き取り）。
- (16) ほかにもさまざまな製法がある。たとえば、ナコーンパトム県カンペンセーン寺の僧ペオ師は、粘土、7カ所の墓地の土、7カ所の船着き場の土、7カ所の塩分を含んだ土でクマントーンを作った。あらかじめ人形の型枠（ブロック、凸版）を作っておき、そこに混ぜ合わせた土を詰め、成形後に型枠から取り外す。そして、焼き上げて完成させる。時間は1晩と1日程度かかる。多いときで1日に20~30体が作られた（2016年8月29日、カンペンセーン寺の僧タンクアイ師への聞き取り）。また、同県ターコン寺では金属（スズと銅）で作られた。焼き物と比べて丈夫で、割れにくいからである（2016年8月29日、ターコン寺の僧ニコム師への聞き取り）。
- (17) メーターは、仏教語としては四無量心（慈・悲・喜・捨）のうちの「慈」で、他人を幸福にしようと希望する無量心を持つこと（富田 1987：1398）。
- (18) 2016年8月29日、ナコーンパトム県ターコン寺の僧ニコム師への聞き取りによる。
- (19) タイ語の発音としては、Jack は「チャック」、Jillは「チン」に近い。
- (20) 本稿では、お守り関連の専門雑誌について言及できなかった。別稿にゆずりたい。
- (21) ルークテープ信仰についてはクリティニー（2016）を参照。
- (22) 2016年8月29日、ナコーンパトム県ターコン寺の僧ニコム師は「最近ターコン寺のクマントーンが22万パーツ（2017年1月6日現在で約70万円）で売買された」と話した。
- (23) チャトゥカームラーマテープは、2006年から2007年に大流行したお守り（ブリーチャー2009）。守護神として信仰されていたものが、金運を上昇させる神として崇められるという意味変容の図式が、クマントーン信仰の場合と類似している点が興味深い。
- (24) 2016年8月29日、ナコーンパトム県カンペンセーン寺の僧タンクアイ師への聞き取りによる。

## 参考文献

- 畑野栄三監修 (2013) 『日本のお守り 神さまとご利益がわかる』 池田書店。
- クリティニー・ボンタナラート (2016) 「ルークテープ、タイ人の信仰とマーケットを揺るがす」 盤谷日本人商工会議所『所報』648: 32-34。
- プリーチャー・ヌンスック (2009) 加納寛訳 『タイを揺るがした護符信仰——その流行と背景』 第一書房。
- Rankhunant Kanharong (2014) *Kansusan Ruang Khwamsaksit khong Kumangthong nai Sangkhom Thai*, Ph.D.Thesis, Chulalongkorn University.
- Rom Bunnak (2011) *Phi haeng Phaendin Sayam*, Sayam Banthuk.
- 陳令嫻 (2006) 「台湾社会における『嬰霊』と『小鬼』信仰」『時の扉——東京学芸大学大学院 伝承文学研究レポート』18: 23-27。
- Thotsaphon Changphanitkun (2009) *Sutyot Kumangthong : Deknoi Phubandan Khwam-ramruai yang Luachua*, Samnakphim Khomma.
- 富田竹二郎編訳 (1981) 『タイ国古典文学名作選』 井村文化事業社。
- 富田竹二郎 (1987) 『タイ日辞典』 養徳社。
- Uthai Sinthusan (1999) *Saranukrom Thai Anuphak & Asomsin lae Sat*.